

緑の協力隊

クブチ沙漠 恩格貝での植林ツアー

鳥取：緑の協力隊 ツアー概要

1991年に設立された日本沙漠緑化実践協会（初代会長：故 遠山正瑛鳥取大学名誉教授）は、同年より乾燥と沙漠化が大きな問題となっている中国内蒙古自治区クブチ沙漠の恩格貝（オンカクバイ）において植林活動を開始しました。沙漠化の問題は黄砂という形で日本での生活にも大きく影響を与えています。

活動開始以来、367万本を植林し、砂丘の移動を食い止めるため、沙漠において農業をはじめとする持続可能な産業の定着を図ることを目標とした沙漠緑化活動を展開しています。

緑化活動に大きな役割を果たしているのが、日本全国各地から集まった植林ボランティアのみなさんです。これまでの参加は日本全国から延べ約10,600人にもものぼり、その活動、実績はNHKの人気テレビ番組「プロジェクトX」に放送されるなど多くの場所で紹介されてきました。

日本沙漠緑化実践協会「緑の協力隊」は、その植林活動にあなた自身の手で実際に参加していただくボランティア・ツアーです。実際に体験し、この活動の大切さを一緒に考えましょう。

クブチ沙漠恩格貝（オンカクバイ） 
人の手によって蘇る緑を広げよう！！

日本沙漠緑化実践協会の中国における最初の植林地が、内蒙古自治区伊克昭盟（イクショウメイ）達拉特旗（ダラトキ）烏蘭郷（ウーランゴウ）にある恩格貝クブチ沙漠総合開発師範区です。

当時鳥取大学で日本の乾燥地開発研究の第一人者だった遠山正瑛日本沙漠緑化実践協会初代会長がこの地で活動を開始したのは1991年のことです。以来、日本から派遣されたボランティア「緑の協力隊」と現地スタッフらの手により植えられた苗木は367万本以上に及びます。

見渡す限りの沙漠の地に突如青々と茂るポプラの林が出現する様は驚きの一言に尽きます。これらの木々は、まぎれもなく人の手により植えられ、育てられてきたものなのです。現在も「緑の協力隊」派遣活動により、年間300人以上のボランティア参加者がこの活動を受け継ぎ地球環境保護のため汗を流しています。

 **中国の学生と交流を図ろう！！** 

ツアー中、内蒙古大学オルドス学院を訪問します。現地の大学の雰囲気を感じながら学生との交流を通して、相互理解と親睦を深めて国際親善を図りましょう。

内蒙古大学オルドス学院

地方政府の投資で、2008年7月20日に創設された全日制大学。

学生数：現在約1,870人

専攻：観光管理、自動化、土木工事、交通運輸、材料科学、科学行程および工芸、電子情報科学及び技術、民族予科